

認知神経科学と信頼性主義

青木滋之 (Shigeyuki Aoki)
名古屋大学情報科学研究科

認識論の自然化というプロジェクトを考えたとき、その中心的な立場の1つとして挙げられるのは信頼性主義である。信頼性主義は Goldman(1979, 1986)がその典拠とされるが、分析的認識論を批判しつつ知識の自然種説を推し進める Kornblith(2002)も Goldman(1986)を実質的に踏襲する結果になっており、信頼性主義者であるという点においては変わらない。

これらの信頼性主義の認識論者たちが、認知的能力 capacity に言及している点は注目に値するだろう。例えば、感覚的知識が外界との信頼できるリンクを反映しているか否かは、その主体がその環境下で、どのような能力を発揮するかに依存する。こうして信頼性主義は、重要な仕方で、我々の実際の認知的能力についての科学的知見とオーバーラップしている。ただし、どの経験科学にガイダンスを求めるかによって、その認識論的な帰結が変わってくることに留意せねばならない。

私が他の箇所でも論じたように、上記の Kornblith(2002)は、「知識」を動物に帰属させることでその複雑な行動を説明する、認知行動学(Cognitive Ethology)の知見に依拠しながら信頼性主義へと到っている。しかし、人間や動物の認知的能力そのものをよりストレートに扱い、マイクロレベルから我々の認知を扱う認知神経科学に範を求めることで、我々は同様な信頼性主義の知識の定式化 信頼できる仕方で生み出された真なる信念 *reliably produced true belief* へと至るのであろうか。

Churchland(2001)は、認知行動学のようなマイクロレベルに限定された研究分野ではなく、マイクロレベルから認知を扱う認知神経科学(Cognitive Neuroscience)の知見が、信頼性主義を大きく変貌させようことを論じている。20年間ほどの神経科学の研究は、人間の認知に支配的な認知的表象が、認識論者たちによって一般的に考えられてきたような命題的なものではなく、そしてそこでの表象の担い手 *vehicle* は真理値を持つようなものではなく、むしろ神経科学が示す真理観というのは、問題解決志向のプラグマティストの真理観と合致するものであること、を示唆している。

本発表では、そうした認識論的帰結を、信頼性主義に即して評価することを目指したい。さらに一歩進んで、そういった認知神経科学からの帰結が、実は認知行動学の知見と整合するということも、示したいと考えている。

参考文献

- Churchland, Paul (2001), "What Happens to Reliabilism When It Is Liberated from the Propositional Attitudes?", in *Neurophilosophy at Work*, Cambridge UP, 2005, pp. 88-112.
Kornblith, Hilary (2002), *Knowledge and its Place in Nature*, Oxford UP